



わたしの中の本

幼児教育学科 准教授 多田 幸子

Ueda Women's Junior College Library News Misuzu

八月の施設閉鎖期間、感染症に加えて雨天の影響を受け、自宅にこもって過ごしました。家で過ごした四日間は、時間をかけて本を読むのによい機会でした。ここでいう本は、文字の印刷された紙を複数枚、綴じたものをさします。最近はおっぴら、書籍リーダーで電子データの“本”に触れていたため、ページを割り開く・めくるといった動作がちょっと新鮮に、でもどこかしっくりきて、だからでしょうか。しばらくなかったほど、読むことに没入しました。

久々の“没入”体験を経て思ったのは、自分の中の本の表象、それ自体が確かに身体運動的な要素を含んで構成されているということです。電子書籍が身近になり、リーダーの操作になじんでくると意識しがたくなるその身体性に、外出できなかった短い夏休みの間に改めて気づきました。自分は本というものを幼児期あたりから長い時間をかけて身体とその運動を通して理解し、アクセスする身体なしには説明できないかたちで表象化していたんだなと妙な感慨を抱きました。この表象が一新されるまでにはしばらく時間がかかりそうで、そうなるまでまだまだ、開く・めくる・はさむ・閉じるのできる本も手元に置いておきたいとも思いました。

ところで、悪天候の連休中に読んでいた一冊にPapini, M.R.の『パピー二の比較心理学：行動の進化と発達』があります(比較心理研究会訳で2005年に北大路書房より刊行)。進化論を基盤に動物を対象とする行動科学におけるパラダイムを構築することにトライした大著です。北米では心理学の有名なテキストの一つとなっているから…というよりも、昨年からはひょんなことで飼育に関わっている鳥(鳴禽類)との関係を見直したい、はっきり言えば、ぜんぜん言うことを聞かない彼らを何とかしたくて手に取った本でした。

そんな『パピー二の比較心理学』を、自宅隣の空き地がどんどん水田化していく中で読み進めていった結果、問題解決には至っていないものの、朝に夕にゲージ内で飛び散らかっている彼らの、社会的行動の学習過程の一端は知ることができました。それによって、心理的距離が縮まったのだろうと推察します。愛着まで行きませんが鳥類への興味・関心が以前より湧き、多少は前向きに今後の共同生活を考えられるようになりました。

この『パピー二の比較心理学』は今のところ書籍リーダーで読むことができません。ご興味おありの方はお近くの研究施設附属の図書館まで。この本のほかにも、図書館には、自分の身体性を通して理解すること、味わうことが求められる本が収められています。また、そういった本に精通した専門職が常駐してあります。ためしに“没入”してみたい方、身体ごとのめり込む読書を求める方には、たくさんのお会いがあるのではないのでしょうか。

目次

わたしの中の本
幼教1, 2年生の授業から「読書」の意義を再考する
本と私
研究者と寝かしつけ士に必要な本
読書を好きになったきっかけ
絵本と私
本がある環境
人生の参考書
上田女子短期大学教員が学生にすすめる本
本学教員の新刊著作

CONTENTS

幼児教育学科 准教授	多田 幸子	1
幼児教育学科 専任講師	関 裕子	2
幼児教育学科 専任講師	今井 香織	3
総合文化学科 専任講師	遠田 将大	4
幼児教育学科 1年	東條 礼佳	5
幼児教育学科 2年	塚田まほろ	5
総合文化学科 1年	武士侯葵心	6
総合文化学科 2年	山下 彩佳	6
総合文化学科 教授	大橋 敦夫	7
幼児教育学科 准教授	酒井真由子	7
		8

幼教1, 2年生の授業から「読書」の意義を再考する

幼児教育学科 専任講師 関 裕子

「読書は本当に必要か？」

これは、1年生のオムニバス授業「キャリアアップ I」1講目「激論バトル」で、A先生から出されたテーマである。コロナ禍のため、その日着席した2部屋の教室で「読書必要派」と「読書否定派」に分かれてのスタートであった。当初、希望していない「派」だった学生からは戸惑いの声が聞かれたが、ぼつりぼつりと出された意見をトランシーバーでつないでいるうち、次第に討論は熱を帯びていった。読書肯定派からは、「直接経験できないことを知ることができる」「読む力が身につく」「知識が増え、頭が良くなる」等の意見が出された一方で、読書否定派からは、「知識は語りつがれてきた。口伝でもいいのではないか」「読書感想文など、読書が目的になっていることもある。読書は方法で目的ではない」、「読んだだけでわかったつもりになるより、直接体験の方が大事」等、両者ともに手応えのある意見が積み重ねられていった。

この読書必要・否定論をつなぎ、2講目の問いとしたのは「人生のキャリアアップに必要なものは何か」である。今後さらにAI化が進み、今ある仕事が淘汰され、予測不能な社会になると言われる中で、職種を越えてどのような思考が求められるのか。「読書必要・否定派」を例にすると、どちらが正しい、正しくないではなく、大切なのは、多様な意見や情報を得て自分の考えの引き出しを増やすことにある。状況により、じっくり読書で思考を掘り下げる時があれば、ネットでスピーディに多くの情報を得たい時もあるだろう。読書はその「方法」のひとつで、ネット検索、対話など様々な方法を試しながら、その時の最適な答えを探っていく。それが人生のキャリアアップにつながるのではないかと、というようなことをゆっくり掘り下げていった。

さて、「読書は方法で目的ではない」「思考の多様性」を前提としつつ、自身は圧倒的に「読書必要派」である。奇しくもその理由を代弁するようなコメントが、

2年生の授業「子ども理解と援助」のリアクションペーパーに書かれていた。授業内容は、実際の幼児の姿(画像)から具体的な関わりとその根拠性を、教科書の歴史上の先達の思想や保育方法・計画などから考察したのだが、学生のコメントに心を揺さぶられた。

「ルソーやペスタロッチ、フレーベル等の言葉に、ここにも味方がいるのだ、と思いました。実習でなにが正しいか、正しくないかわからなくなってしまっていたけれど、就職して迷ったときは、この考えを見直すことで、自分の保育に少しでも自信を持ちながら保育をしていくことができると感じました。」「偉人の考えの大切だと思うところに線を引いて読んでいたら、子どもの見方の理由がはっきりしてきました」「子どもを理解する大人が少ない時代に、声をあげた思想家の方たちはすごいと思う」等、理論と異なる現実(実習)を経て、自分の思考を支える理論の必要性に気づいたといった内容が見受けられた。

これらのコメントは、私の保育実践を基盤にした思考が、歴史上の先達の学びの上に成り立っていることを再認識させてくれるものであった。そして、今、日本社会で保育のあり方が混迷している中で、保育の価値や判断基準の根拠となる基軸が、多くの書籍にあることを確かなものにもしてくれた。「読書」は、子どもの育ちを守る専門職としての自分を、豊かに、そして支えてくれる力強い存在である。



本と私

幼児教育学科 専任講師 今井 香織

私は、本たちが放つあの匂いが何故か好きだ。高校時代、毎週金曜日の放課後は、決まって友人と帰り道にある書店に立ち寄っていた。書店に着くと、会話も全くなくなり各々本棚に向かいながらお気に入りの一冊を探す。そして各々お気に入りの本を手にし、またあれこれ会話をしながら帰路につくのである。今思うと、当時は読む本を購入するために書店に通っていたというよりも、その時の自分の心が引き寄せる本を本棚から見つけ出すという、宝探しのようなあの瞬間を楽しみに通っていたように感じる。高校生の私は、“その時”の自分の感情に向かい合うために書店に通っていたのかもしれない。

そして、そんな瞬間が味わえるのは図書館も同じであった。私は図書館へ行くことも好きであった。また、図書館に足を踏み入れた瞬間の匂いが好きだった。幾分かの重みをもったようなその匂いは、印刷を終え新しい持ち主を待ちながら店頭で並んでいる本から放たれる匂いとは少し異なる。大学時代、私は心を落ち着ける時間を求め図書館に通っていた。卒論の提出前でも、論文の資料集めのために図書館に出かけていたというよりも、論文が終わらないという焦燥感に対する癒しをあの匂いに求めた中で、偶然論文に適した資料を見つける、ということが多かったように思う。

私は、本がある場所が醸し出すあの空間に癒しを求めに出かけて行き、自分の心がどんな本を引き寄せるだろうかと自分を探りながら本に向き合っていたのである。今はやりたいことが山のようにあるため、あの頃ほど本たちが待つ空間に通えてはいない。けれど、やはり本のある空間に身を置くことは好きであるし、あの頃の本との向き合い方は、今も変わっていないように思う。

日々生活をしていると、当たり前だが様々な出来事が起こる。ある程度は予期できていたことから思いもよらなかった出来事まで、それはそれは多岐にわたる。

ああ、生きていて良かった！と心から思うような出来事もあれば、どうして今こんなことが起きてしまったのだろうかと思きたくなるような出来事もある。でも不思議なことに、本はどんな気持ちの時でも寄り添ってくれるのである。また、現実とは異なる小説の世界にのめり込み感情移入したり、他国や自国で生きるものの現実を知りそれまで知らなかった自分の感情を発見したりすることが、誰かの気持ちを想像する事に繋がることもある。さらに、同じ本を読んだとしても、人生経験を経て読むとまた新たな発見ができることもある。単純に読み込めていなかった部分の発見もあれば、当時は想像でしかなかったことを実際に経験し、その活字の裏側にあった著者の感情が初めて理解できることもある。本を通してそれまで気づけていなかった見方を自分の中に発見した時は、自分は成長したのではないか、などと思ってしまうものだ。

本を読むこと、それは、今自分が生きていることを実感するための営みであるかもしれないと時々思う。自分を見つめ直したり、自分の気持ちを発見したり、誰かに思いを馳せてみたり……。皆さんにとって本とはどのような存在だろうか。私は、今ここに生きている自分を感じながら、これからも本たちとの出会いを楽しみたいと思っている。



研究者と寝かしつけ士に必要不可欠な本

総合文化学科 専任講師 遠田 将大

こんにちは。上田女子短期大学で心理学関係の授業をさせていただいている、遠田将大です。毎日の授業準備、家事や育児に追われ、本当にあっという間に秋になったという感じがしています。図書館報「みすず」の原稿も、授業がない夏季休業中に書こうと決めていたのですが、結局、メ切直前の9月下旬に書いています。

さて、本題に入りましょう。「みすず」へ寄稿するにあたって、私と本との関係について考えてみると、これまでにはなかった新しい関係が生まれていることに気づきました。今の私にとって本は、研究の心強い味方であるだけでなく、息子と関わるきっかけにもなっていました。そこで、この2つについて少し語ってみようと思います。

【研究の心強い味方である本】

私の専門は、学校と心理学を掛け合わせた学校心理学です。これは、学校現場で生じている課題や問題について心理学の知見からアプローチしていく学問領域です。現在、私はどのようにしたら学校現場で対話を介して深い学びが実現できるかを研究しています。この研究をしているのは、現場において対話を介して深く学ぶことが難しいとされているからです。私の研究によれば、小学生の約半数は他者と協同的に学ぶ準備が整っていないことが分かっています。子どもがそのような状態ですから、指導する教師も授業で対話的な学びを実施することに困難さを抱いているようです。このため、私は協同的に学ぶ準備が整っていない子どもが、どのようにしたら、他者と共に対話を介して深い学びができるようになるのかを明らかにしようとしています。私にとって本は、この研究を進めていくのにとっても重要です。研究では、複数の専門書を照らし合わせて読み、どこまで研究されていて、どの部分が不足しているのかを明らかにして行っています。私にとっての本は、研究の心強い味方であるといえます。

【息子と関わる機会になっている本】

私のもう一つの専門は、「寝かしつけ士」です。聞きなれない言葉かもしれませんが。私が勝手に名付けました。寝かしつけ士とは、子どもを寝かしつけることを業にしている人のことです。この寝かしつけ士に必要な不可欠なのが絵本です。私は、1歳になる息子に毎夜絵本の読み聞かせをしています。読み聞かせている絵本は、その日の気分に合わせて『じゃあじゃあびりびり』『くっついた』『しましまぐるぐる』『お?かお!』『のせてのせて』『いないいないばあ』『はらぺこあおむし』などです。最近の息子のお気に入りには『ひよこ』です。息子をヒップシート(ウエストポーチに子どもが座るための座面がくっついているもの)にのせ、ゆったりと体を揺らして絵本を読み聞かせていると、息子は、はじめは興味深く眺めていますが、次第にうとうととしてきて、こてっと眠りにつきます。絵本の続きは夢で見るのかなあ、と思いながら、寝かしつけ士は絵本の読み聞かせを終わります。

私は、研究者として、また寝かしつけ士として、一歩を踏み出したばかりです。これからも、本を相棒として頑張っていこうと思います。



読書が好きになったきっかけ

幼児教育学科1年 東條 礼佳

私は中学2年生の時に「真田丸」を友だちに勧められて見るようになってから戦国時代に興味を持ち、そこから戦国武将の本や日本の城、近世史などの戦国時代にまつわる本を読むようになりました。本を読むようになってから、他の時代にも興味を持つようになり、百人一首の本や古典文学など様々な本を読みました。自分が読んで良かったなと思った本について紹介したいと思います。

1つは『戦国武将の解剖図鑑』という本です。長い文章が書いてある訳ではなく、その戦国武将がどんな人物だったのかがわかるようなキャッチコピーや、その人物にまつわる出来事、城の構造、家紋、刀や甲冑、兜の名称などが分かりやすくまとめられており、楽しく読める1冊になっています。また、教科書には載っていない人物や事柄が多く記載されており自分の知識が増えたり、歴史を考える上での視野も広がったりしたので読んで良かったなと思いました。

2つ目は『ときめき 百人一首』という本です。「和歌」本体の仕組みをはじめ、作者や出典歌集、部立て、現

代詩訳、解説・読解などが記載されており百人一首を分かりやすく学べる本になっています。自分なりに作者の気持ちを考察してみたり、昔の人の気持ちに共感したり、風情を感じることができるので終始楽しみながら読むことができます。百人一首を覚えることで競技かるたを楽しむことはもちろん、日本の良さを改めて感じることもできたり、古典の学習にも大いに役立ったりしたので読んで良かったなと思いました。

私は小学生の頃は親に言われて少し本を読むくらいで、読書は好きではありませんでしたが中学生の時に歴史に目覚めてからは自分でも驚くくらい読書が好きになりました。読書が好きになったきっかけは自分が「もっと知りたい!」と思えるような好きなことに出会ったからだと思います。最近、文豪をモチーフにしたアニメを見て、読みたいと思う小説がたくさんできたので時間を見つけて読めたらいいなと思います。

絵本と私

幼児教育学科2年 塚田 まほろ

私が、保育園にいた頃よく覚えているのは絵本を読んでいることです。園や家に置いてある絵本を1人で、時には弟など年下の子へ読み聞かせとして読んでいました。私は絵本がそれほど好きだったのだと思います。

しかし、成長と共に絵本はあまり読まなくなってきました。そんなある日、授業で絵本を作るというものがありません。いざ自分が絵本を作ることになるとうすればいいのか分からなくなってしまいました。そこで私は、図書館へ行き久しぶりに様々な絵本を読んでもらうことにしました。すると、どの絵本も何かしら伝えたいことがあるのだと気が付きました。本を作る上で何かを伝えたいことがあるのは今では当たり前だと思います。しかし、子どもは作者の伝えたいことなど一切考えずに読みます。それでも作者の伝えたいことは子どもに伝わっているのです。そんな絵本を作れたらいいなと思いました。私が誰かに伝えたい大事な事が伝わるように、一生懸命作りました。その絵本の内容はあまり覚えていませんが、その時に伝えたかったことや頑張ったことは今でも覚えています。絵本を


作ることで、絵本の面白さを学べたのです。それから私は、高校へ進学し文芸部に入部しました。昔授業で、絵本を作った楽しさや好きな物を作る嬉しさがずっと心に残っていたからです。

そして、上田女子短期大学に入学し、子どもについて学ぶ上で改めて絵本について学んでいます。私は、絵本を選ぶ際、絵柄で決めてしまうことが多いのですが、実習で子どもが持ってくる絵本は絵柄など関係ありません。「絵」本として、絵柄をきっかけに選んだり、絵柄を見ることも楽しみ方の1つですが、絵本そのものを楽しんでいる子どもを見ると、私はまだまだ絵本の楽しみ方を知らないなと思います。しかし、それと同時にこれから絵本と出会う中で、絵本について知り、絵本の楽しみ方をたくさん知っていくと思うとわくわくするのです。絵本と私が出会ってから長い年月が経ち、まだまだその出会いは続くでしょう。その一つ一つが思い出になれるように、絵本を大切にしていきたいと思っています。



本がある環境

総合文化学科1年 武士俣 葵心



皆さんにとって本の存在は、どういうものですか。私にとっては、気づけば直ぐそばにいて、そっと寄り添ってくれる友達のような存在でした。そんな存在だと思えたのは、母のおかげだと思っています。

幼いころから私の家には、居間の机の下の隅や座敷のテーブルの上に本がそっといつも置かれていました。母が定期的に、私が読むように図書館から借りてきていたものでした。いつも本の内容はランダムで、保育園から小学校低学年くらいまでは年齢に合わせたものでしたが、中学年くらいになると図鑑や児童書、ときにはよくわからない本まで借りてきていました。もちろん母に連れられて図書館に行き私が本を選ぶこともありましたが、おおかた母が選んできてくれました。私は、それを興味が向いたら勝手に自分で読んでいました。じっくり読むときもあれば、パラパラめくって読むことをやめてしまったり、全く読まないこともありました。

また、読む本は私が読むように借りてきたものの他に母が自分用に借りてきたものもあり、それらも他の

本と一緒に置いてあったので読んでいました。こうして、ずっと本に触れることができる環境で育ったからか、学校では読書をする習慣を身につけることができました。


また、ランダムに読んでいたせいかいろいろなものを読むことに抵抗がありませんでした。それと同時に、雑多に知識を身に付けることができました。今でもその習慣が続いているおかげで役に立ったことがたくさんあります。例えば、社会の授業が本などを読んで知っていたおかげで理解しやすかったり、レポートを書くときに社会問題などを知っていたことでネタを探しやすくなったりしました。

本に幼いころから触れることのできる環境を作ってくれた母に、とても感謝しています。私は、この環境があったからこそいろいろなことに興味関心が持てる人間になれたのだと思っています。みなさんも、本をすぐそばに置いてみてください。きっと、素敵な出会いが待っているはずです。



人生の参考書

総合文化学科2年 山下 彩佳



皆さんにとって「本」とはどのようなものですか？趣味であったり、暇つぶしであったり、眠くなるから苦手という人もいるかと思います。また、短大生になってから、レポートや卒業論文があるから読まないといけないという人も多いのではないのでしょうか。

私は、本は人生の参考書になると考えています。以前「人生の参考書になる映画」という言葉を目にしました。映画は、人生で困ったときや変化が欲しいとき、生活を豊かにしたいと感じたときに見ると、物語の中の主人公や周りの人たちが、様々な出会いや展開により成長していく様子から、人生のヒントを得られることがあるのだそうです。私は本でも同じように人生のヒントが得られると思っています。

私が本を好きになったきっかけは、幼少期に祖母が布団の中で聞かせてくれた物語です。そのお話は、絵本の読み聞かせではなく、桃太郎とかぐや姫の物語を混ぜた話や、私がいまだに知らない話など不思議な話ばかりでした。目を閉じて、祖母の声を聴きながら頭の中で物語を想像しているうちに、まるでその世界にい

るような感覚になりました。この感覚は今でも忘れられません。これが私にとっての「物語の世界の魅力」です。

この魅力に気づき、これまでにたくさんの本を読んできました。物語の世界に入り込んで読むことで、ふとした時に今まで読んだ本の雑学や登場人物の生き方、考え方を思い出し、私に人生のヒントを与えてくれました。

短大で、司書課程や文学について学修する中で、児童書や絵本の子どもに向けたメッセージも、大人になってから読むとハッとさせられることがあると感じました。単純な表現に込められたメッセージは、その時の自分の心境によって受け取り方が変化します。このことで、より一層心に響くのだと思います。

最近では電子書籍も増えてきており、本を持ち歩かなくても簡単に読むことができます。新型コロナウイルスにより、遊びに行くことがなかなかできない今だからこそ、本に触れみてはいかがでしょうか。何気なく読んだ一冊の本が人生のヒントを得るきっかけになるかもしれません。

上田女子短期大学教員が学生にすすめる本

Vol.
7



総合文化学科 教授 大橋敦夫

学生時代から、ずっとハマっている「辞書」に関するものを取りあげます。

①私の読書の中から

『出版後記』鈴木一平

『大漢和辞典』第十三巻 諸橋轍次著 大修館書店 1974 所収

813.2
Mo 75
-13

辞書の前書きや後書きは、あまり注目されない部分です。辞書は本文の内容で勝負するのが本筋ですが、編纂事情にふれている場合も多く、それらのエピソードに心振るわされることもあります。標記の文章もその一つ。父子二代にわたる出版への情熱が語られています。

②これは読んでおこう——教員・研究者の立場から

『ことばの海へ雲にのって：大漢和辞典をつくった諸橋轍次と鈴木一平』

岡本文良作 PHP研究所 1982

289.1
O 42

大漢和辞典の編纂・出版事情が、平易に説かれています。太平洋戦争期、活字の鋳造・製版のための付属工場を特設し、数十万本の使用活字も彫りあげ、用紙不足に悩まされながらも、第1巻を刊行。しかし、東京大空襲ですべてを失ってしまいます。ところが、出版人・鈴木一平はめげませんでした。

医大生の長男を退学させ、経営に加えます。高校卒業の次男には、大学進学を断念させ写真植字の技術を習得させました。三男は、大学の卒業を待って経理を担当させます。まさに一家を挙げての執念による事業完遂なのでした。

刊行後、『大漢和辞典』全十三巻は、フランスから出版文化賞を受けました。ヨーロッパで、中国学の伝統ある国からも評価されるものとなったのです。

なお、辞書本文の作り手側の諸橋轍次については、以下の書物でうかがい知ることができます。

『漢文のすゝめ：諸橋『大漢和』編纂秘話』

原田種成著 新潮社 1992

820.4
H 32

『諸橋轍次博士の生涯』

漢学の里・諸橋轍次記念館編 下田村 1992

289.1
Ka 55

ご利用ください



リーディングトラッカー・ルーペ

読書補助具です。使い方は、読みたい本のページに置くだけ！読みやすい色は人によって異なるため、8色用意しています。どなたでも自由にご利用いただけます。カウンター横の記載台に置いてあります。使い終わったら返却してください。(館内での使用に限ります。)



幼児教育学科 准教授 酒井真由子

①私の読書の中から

『深夜特急 第1便 黄金宮殿』

沢木耕太郎著 新潮社 1986

図書館に
新版の文庫本が
あります

915.6
Sa 94
1~6

『深夜特急 第2便 ペルシャの風』

沢木耕太郎著 新潮社 1986

『深夜特急 第3便 飛光よ、飛光よ』

沢木耕太郎著 新潮社 1992

沢木耕太郎氏は本書に、香港、マカオ、そしてインドのデリーからポルトガルのサグレスを経て、ロンドンまでを乗り合いバスで横断した旅について書き表しています。私が学生時代に「旅人のバイブル」ともいわれた名著で、私も沢木氏の旅に憧れて、『深夜特急』をリュックサックに入れて旅したことがあります。食べ物や景色の描写が詳細で、特にトルコのドネル・カバブやイタリアのポモドーロのくんだりでは味や見た目に想像を巡らせ、どうしてもそこへ行って食べてみたくなります。コロナ禍のいま、本書を読み、自宅に居ながらにして「旅」を試してみたいかがでしょうか。

②私の読書の中から

『学校って何だろう』

荻谷剛彦著 講談社 1998

図書館に
文庫本があります

370.4
Ka 67

学校には「小学生はランドセルを背負って登校するもの」「教科書を使って勉強するもの」といった「あたりまえのこと」がたくさんあります。けれど、それは本当に「あたりまえ」でしょうか？本書は、学校や教育の「あたりまえ」について立ち止まって考えることができる本です。私は、学生時代に本書と出会ったことで、「常識」を疑い、問いを立てて考えることの面白さを知ることができました。

③私の読書の中から

『あなたはほるものおっこちるところ：

ちいちゃい子どもたちのせつめい』

ルース・クラウス文 モーリス・センダック絵 わたなべしげお訳 岩波書店 1979

E 93
Kr 2

副題を見ると分かるように、本書は子どもの身近な物事について、子どもの立場から説明した絵本です。例えば、犬とは何でしょう？本書によると「いぬは ひとを なめる どうぶつ」です。それでは手とは何？「ては つなぐために あるの」、「ては ぼくにやらせてと うえにあげるために あるの」。子どもの視点で世界をみると、世界は愛にあふれていることに気づくことができる絵本です。

2021年 本学教員の新刊著作

(今年発行の単独著書・共著書・分担執筆書) 著者の五十音順

・大塚美奈子 先生

『運動・遊び・学びを育てるムーブメント教育
プログラム 100 : 幼児教育・保育、小学校体育、
特別支援教育に向けて』

大修館書店 2021年4月発行 (分担執筆)

378
A 93

・大橋敦夫 先生

『洋学史研究事典』

思文閣出版 2021年9月発行 (分担執筆)

402.105
Y 73

・大橋敦夫 先生、斎藤直人 先生

『旧中込学校所蔵教科書目録；戦前篇』

上田女子短期大学大橋・斎藤研究室
2021年3月発行 (共著)

375.9
Ky 8

・小池由美子 先生

『開かれた学校づくりの実践と研究：
校則、授業を変える生徒たち：
全国交流集会Ⅱ期 10年をふりかえる』

同時代社 2021年3月発行 (共著)

374
H 64

『教育と教職のフロンティア』

晃洋書房 2021年4月発行 (共著)

370
Ky 4

『国際交流と学校教育：
グローバル時代を共に生きるために』

三恵社 2021年10月発行 (共著)

『SDGs を学ぶ短大生 持続可能な
社会を、自分から地域からつくる』

(―「長野の子ども白書：地域の中から、
子ども・若者の今を考える」；2021)』

長野の子ども白書編集委員会 2021年5月発行 (共著)
※逐次刊行物コーナーにあります

P370.5
N 16
2021

『高校から見える大学の姿』

(―「教育」No.906)

旬報社 2021年7月発行 (共著)
※雑誌コーナーにあります

・玉城 司 先生

『真田幸弘点取百韻：翻刻と解題』

勉誠出版 2021年2月発行 (共著)

911.33
Ta 78

『寺田洋祐俳画集：蕪村・一茶に遊ぶ』

新典社 2021年2月発行 (共著)

911.3
Te 43

『鳳朗と一茶、その時代：
近世後期俳諧と地域文化』

新典社 2021年3月発行 (共著)

911.35
H 89

『東風流：宝暦俳書の翻刻と研究』

世音社 2021年3月発行 (共著)

911.34
A 99

『元禄名家句集略注；椎本才麿篇』

新典社 2021年10月発行 (共著)



みすず

第48号

上田女子短期大学附属図書館報
2021.12 発行

編集：上田女子短期大学図書館・紀要委員会
発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620
Tel：0268-38-6019 Fax：0268-38-6019
E-mail：lib@uedawjc.ac.jp

編集後記

a postscript by the editor

新型コロナウイルスの感染拡大がもたらした影響は多岐にわたり、極めて深刻な状況ですが、寺山修司「書を捨てよ、町へ出よう」から、「書を抱えて、家へ帰ろう」的な生活習慣を強いられてきました。

このような閉塞感に苛まれる日々であっても、生涯の友となる新たな本を宝探しのように見つけることで、来年こそはこの禍を転じて福にしたいものです。

本学図書館には、あなたが手にして読んでくれることを待ち望んでいる書物がたくさんあります。今までとは違う「もう一人の私」を発見してください。

「最後の頁を閉じた 違う私がいいた」 2021年 読書週間標語

附属図書館長 花岡 勉